

## 1. ヨーロッパからのまなざし

**ヨーロッパ人はなぜ言語を学ぶかー  
機能としての言語とアイデンティティとしての言語  
西山教行（京都大学）**

「ヨーロッパ人はなぜ言語を学ぶかー機能としての言語とアイデンティティとしての言語」という題で報告をいたします。2つの観点から今回の報告をすすめます。まず「なぜ異言語を学ぶのか」を問題提起し、ヨーロッパの言語教育政策を振り返ります。次に、今回は中国語教育に関するシンポジウムですので、フランスにおける中国語教育の現状と課題を考え、そこから異言語教育の目的についてアイデンティティとの関連を探っていきたいと思えます。

## 1. なぜ異言語を学ぶのか

私たちはなぜ異言語を学ぶのでしょうか。歴史的に見るならば、異言語、とりわけヨーロッパのいくつかの大言語、英語、ドイツ語、フランス語は日本が近代化を果たすにあたり、西洋文明を効率的に移入するための重要な道具となりました。英語、ドイツ語、フランス語による「トロイカ体制」（鈴木孝夫）が日本の近代化の実現に貢献し、異言語は文明の移入の道具の役割を担ったわけです。

西洋文明の移入の道具としての異言語の価値は明治から現代に至るまで揺るぐことなく、外国語教師は、たとえその自覚が乏しかったにせよ、文明の移入者の役割を続けてきたと言えます。英独仏というトロイカ体制の言語については文明語としての地位があまりに自明であったため、それらの言語を教えてきた限りにおいて、なぜそれらの言語を学ぶのかという問いは不要だったと言えるでしょう。

しかし1991年に大学設置基準の大綱化が導入され、国の規制緩和のもとで多くの大学がいわゆる「第2外国語」を必修科目から外し、それまでの保護主義的教育政策は変革を迫られました。そして現在に至るまで、英語は国際化の名の下に必要であると見なされ、英語教育に資源は集中的に投下され、その一方でドイツ語、フランス語をはじめとする第2外国語に対する資源は枯渇の方向に向かいつつあります。その中で、「なぜ教えるのか」「なぜ学ぶのか」という問いかけに対する外国語教育上の論拠は見失われつつあります。護衛船団に守られ、文明の移入が成立していた時代には問題とはならなかった現実が、規制緩和によりその基盤の揺らぎに直面し、私たちは異言語教育の根拠を見失いがちな時代へと入っているわけです。

では英語教育を支えている教育学的根拠を他の言語教育に応用することができないのでしょうか。英語学習は社会的・経済的成功という表象を伴っています。ところが、それ以外の異言語は日本社会において必ずしもこのような言語表象を担っているわけではありません。社会的成功や昇進を得られるから、異言語を学ぶという態度は英語以外の言語教育には当てはまりにくいのが現状です。現在、中国語はこのような表象を担いつつありますが、それについては後ほどフランスの例を取り上げの中で考えたいと思えます。

「なぜ異言語を学ぶのか」。この問いについてヨーロッパ人は50年以上前より思索を深

めてきたようです。ヨーロッパ人は多言語と多文化をこの地域に不可欠のアイデンティティと考え、多言語教育を推進してきましたが、その基盤の一つが欧州評議会の言語教育政策にあります。この国際組織は第2次世界大戦後の1949年に戦争への反省と民主的ヨーロッパの構築を願って設立され、1954年に「欧州文化協定」を締結し、その中では加盟各国が相互の言語文化の学習を奨励するよう定めています。戦火を交えたヨーロッパ人、とりわけ19世紀以来3度にわたり戦火を交えたドイツ人とフランス人が互いの言語を学び、それにより信頼と尊重を深めることが重要であるとの認識にいたったのです。隣国の言語学習をコミュニケーションに役立つといった機能的次元でのみ考えるのではなく、社会的次元において考え、隣人の異言語を学ぶことは平和で民主的な社会の構築につながると確信したのです。母語プラス2言語という多言語教育を進めるヨーロッパ人の言語教育観の根底には、このような理念が潜んでいることを見逃してはなりません。

## 2. フランスの中国語教育

フランスにおける中国語教育研究の歴史は西欧でもっとも古いものの一つです。16世紀に国王フランソワ1世によって創立され、フランスの知の最先端を行くコレージュ・ド・フランスは1814年に「中国語・中国文学講座」を開設しました。これは世界の高等教育機関において初めて設置された講座であるといわれております。そして1840年からは東洋語学校が中国語教育を開始しました。1958年からは中等教育に中国語教育が導入され、1964年の国交回復以降、教育を通じた交流は深まっているようです。

現在、フランスにおいて、中国語は、ロシア語、ポルトガル語、アラビア語、ヘブライ語の学習人口に勝り、外国語教育において第5位の位置を占めております。フランスにおける中国語学習者は、中国が2001年にWTO(世界貿易機構)に加盟して以来、増加の一途をたどっています。2006年の統計によれば、学校教育において12000人あまりが中国語を学び、そのうち10000人は中等教育の生徒です。ちなみに、日本語は第8位、あるいは第9位に位置づけられます。

またおよそ200名を数える教師については、その半数が非常勤のネイティブのようですが、教員免状については一般と上級の2種類を備えており、上級免状のみを設置する日本語教育と比べて、教員層に厚みがあるといえるでしょう。

このほか、孔子学院もすでに7校が設置されており、2009年からは欧州連合レベルでもヨーロッパ人学生への中国語の語学研修が本格化するなど、政府間レベルでの交流も進展しつつあります。

ではなぜ、ここ数年フランスにとって、一見すると隣人の言語であると言い難い中国語の学習が発展しているのでしょうか。

2006年にフランス国民教育相は「中国語教育の発展」と題する演説の中で、中国語を「新興の言語」と位置づけ、グローバル化により加速する人的移動によって生まれた新たな隣国の言語にとらえます。これまでのヨーロッパ言語教育政策は隣人の言語をヨーロッパ域内にほぼ限定して考えてきたわけですが、グローバル世界において国境の概念は著しく拡大したわけです。

このような位置づけのもとに、中国語教育は文化的関心よりも職業的視点を全面に押し出して、振興を狙っております。フランスと中国とは地理的に隔絶しているわけですが、2005年の統計によれば、グローバル化の波の中でフランスは60万人の中国人観光客やビジ

ネス客を招きよせました。また中国人留学生の数も無視することはできず、2006年には2万人を数え(日本人留学生は2000人弱)、中国語はフランス国内においてますますプレゼンスを高めております。そしてそれに伴いフランス国内での中国語の需要も高まっており、さらに中国への展開を図るフランス企業も増加の一途をたどるばかりで、国内外の中国語の経済的有用性は高まるばかりです。実際のところ、2006年に中等教育視学官が中国語教育分野で初めて任命されるにあたり、当時の国民教育相は中国で英語の通じない地域にフランス企業が展開する場合の中国語の重要性を訴え、中国語学習の第一の目的を経済的機能性と強調しています<sup>1</sup>。

さらに興味深い点は、職業的有用性に結びついた中国語学習がフランス人の若者全般に向けられているのではなく、移民2世を中心とし、社会的貧困に直面する郊外の若者に向けられている点です。2005年のフランス郊外の暴動の翌年、当時の機会均等担当特命大臣は中国語教育の発展と題する演説を行い、その中で、興隆しつつある中国語教育こそ、移民2世など社会的阻害の中に生きる若者が雇用を見つけ、社会的上昇を遂げる上での武器であると訴えています<sup>2</sup>。これは、これまでの学校教育で行われてきた言語教育で成果を収めることのできなかつた若者が新たな分野での再出発をはかるために中国語こそ有利であるとの判断の表れであり、さらに大臣は中国語学習が思考力を養う上でも有効であること、そしてこれはフランス語能力をあげるにも結びつくことを指摘しています。つまり中国語は経済的有用性から社会的上昇を可能とする言語であるばかりか、知的訓練にも適切で、フランス語能力の向上にもつながると明言しているのです。

またフランスの若者にとって中国語の世界とはカンフー映画のような大衆文化に代表されるもので、古典世界や文字文化を喚起するものではありません。言い換えるならば、他のヨーロッパの言語と比較して、言語表象の相対的乏しさが、中国語学習を振興する上で動機づけを高める得るともみなされているのです。

### 3. まとめ

「なぜ異言語を学ぶのか」との問いについて日本の現状を振り返りながら、ヨーロッパの言語教育政策の原理に遡り、多言語教育を進め、隣人の言語学習を訴えてきた点を確認し、そして中国語学習に焦点を当てて言語学習の目的を考えてきました。フランスでの中国語教育を見る限り、そこでは言語の機能的価値が強調され、アイデンティティとしての言語の価値があまり取り上げられていないように思われます。しかしこれまで社会において阻害されてきた若者に向けて中国語学習の意義を説く方策は、言語学習が学習者の社会的アイデンティティを構築する上で重要な役割を果たすことを確認するもので、言語の生み出す新たなアイデンティティ機能が肯定されていると思います。

なぜ異言語を学ぶか、言語はアイデンティティ構築にどのように関わるのか、このような問いはフランスのみならず、日本の言語教育においても持ち続けるに値する問題意識であると考えます。

---

<sup>1</sup> 2006年3月1日国民教育大臣挨拶「中国語教育の発展について」

<http://www.education.gouv.fr/cid866/index.html>

<sup>2</sup> Discours d'Azouz Begag, Ministre délégué à la Promotion de l'Égalité des chances, « Développement de l'enseignement du chinois », 1er mars 2006